

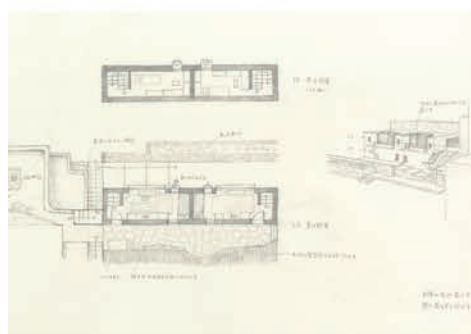
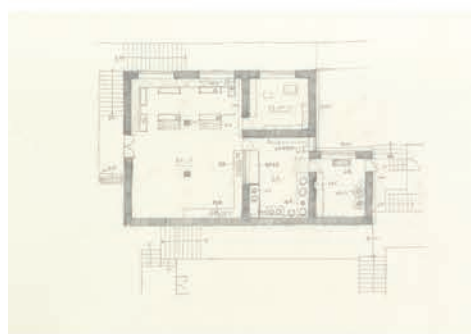
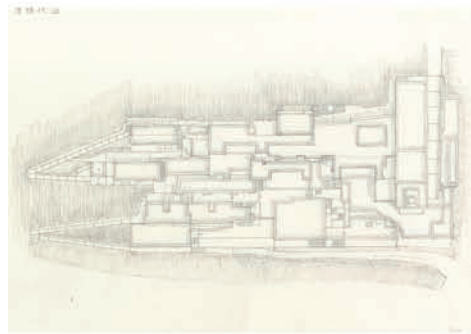
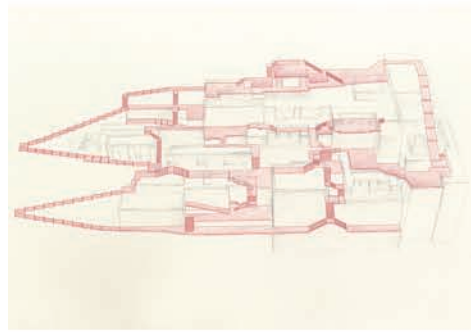
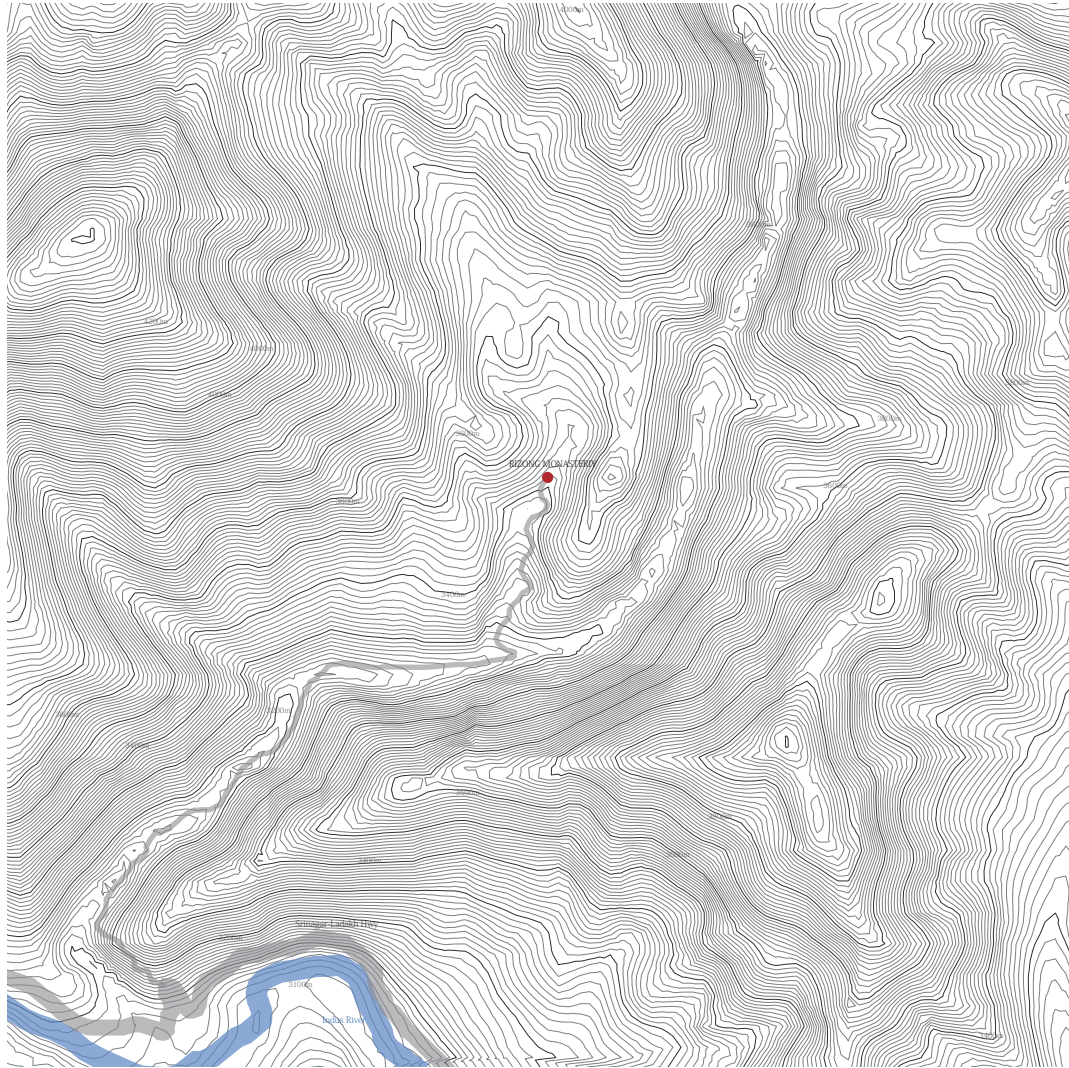
Rizong monastery

まずリゾン僧院では、僧院に寝泊まりしながら彼らの生活を体験するとともに、スケッチを行いました。スケッチしていくにつれ、その質感やそこで立ち現れる現象を表すため、落ちてる砂や色を使うようになっていきました。また、実測も行いました。

動線は入り組んでおり、どうやってお堂までたどり着けばいいか明確な道筋はないにもかかわらず、訪れるものは緩やかに斜面を巡る道を選んで訪れます。すると次第に大地が近づき、暗い空間になって、最上階の立体曼荼羅のある場所では視界が谷に向かって開けます。

環境・地形的特徴と僧院

- 木々が一切生えないような荒涼とした荒々しい山奥の谷間にそびえ、周囲の地域からも隔離されている。
- 急な斜面を縫うように動線が配され、入り組んでいるが、参拝者、僧侶はある動線を選んで歩く。
- ある動線は五体投地がしやすいような傾斜、幅がつけられている。
- 夜は周囲の山によって月が隠れてしまうため、星々がはっきりと見え、宇宙の広がりの中にいるよう。
- 朝は住居棟がある西側を最も早く光が照らし、夜も最も早く訪れる。
- 大地の谷間に抱かれるようにあるので、風はあまり強くはないが、夜は強い風が戸をたたく。

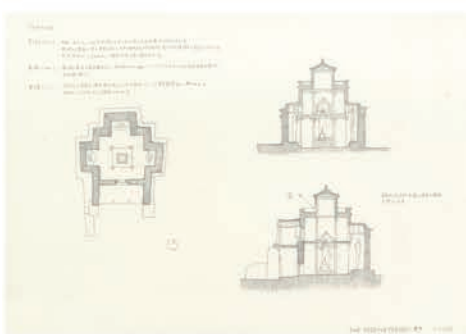
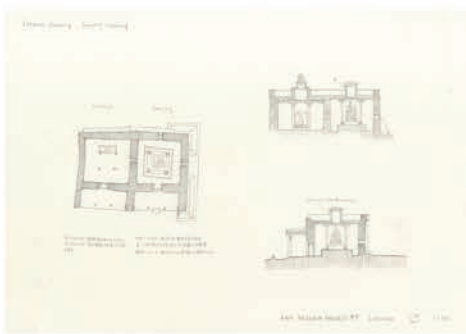
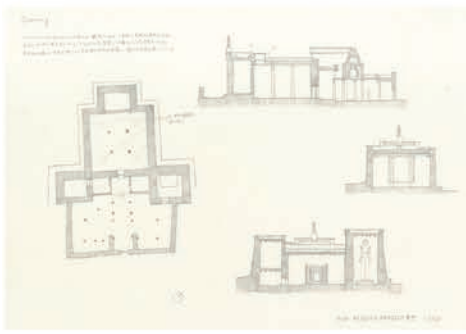
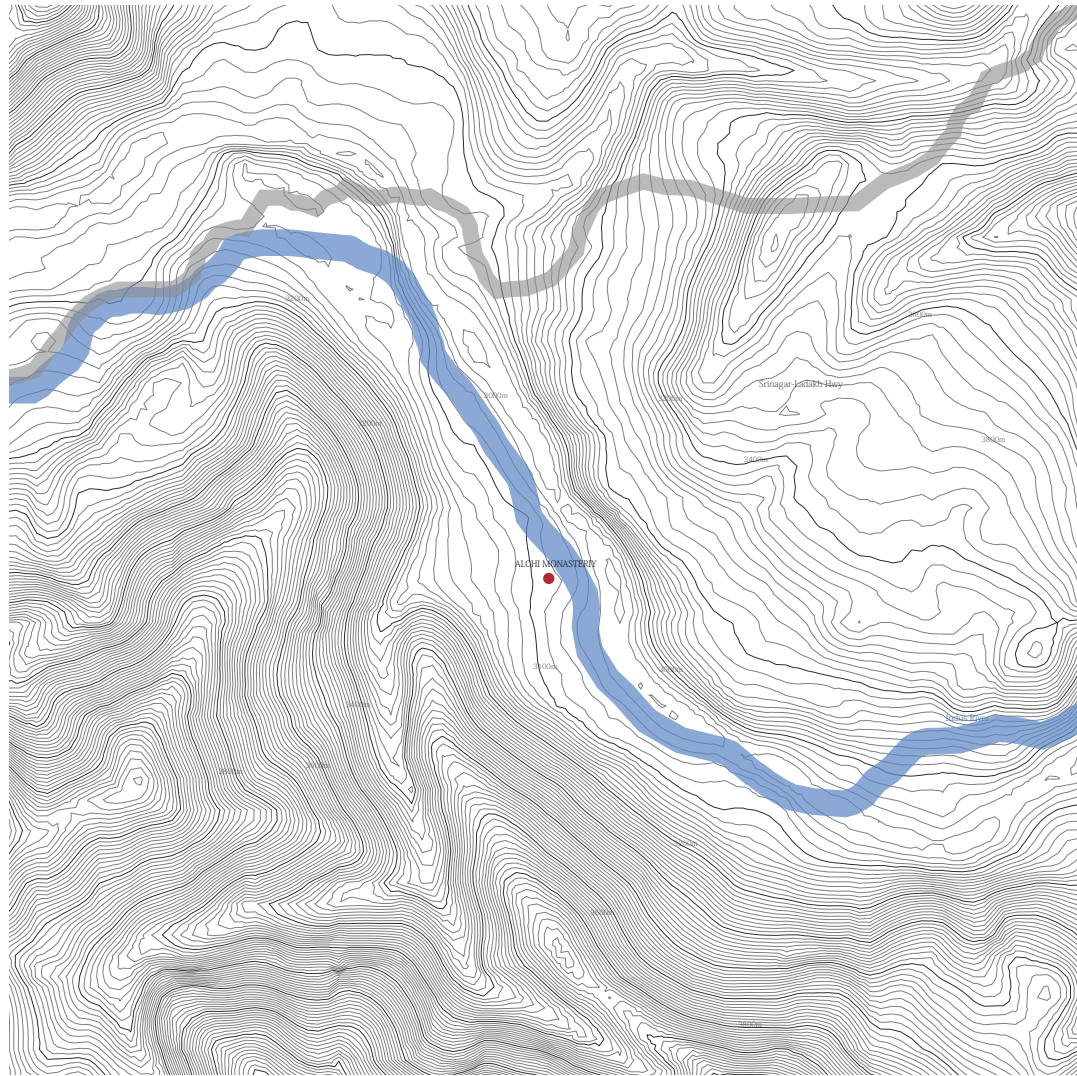


Alchi monastery

次にアルチ僧院では、棚田の微地形に沿った建物は高い位置から天井高が低くなっています。それは3層吹き抜けの空間に立像が林立し、上部に曼荼羅が見える劇的な空間から、次の空間では曼荼羅に囲まれた祈り・瞑想空間となり、さいごは座像が光の中、空から降りてきたような構成となっています。また動線も、周囲を周り続ける者と内部まで参拝に来るものを分けるよう微妙な変化を持っています。 またここでは僧侶の実家に泊めてもらい、伝統的なラダックの暮らしを体験しましたが、民衆の中にも仏教の思想があり、家の工法と構成は僧院と近いものであることを知りました。

環境・地形的特徴と僧院

- 僧院はインダス川沿い、ほぼ平地の農村地帯にある。
- 動線は、周囲を回り続ける参拝者とお参りをする参拝者との微妙な段差、スロープによって分けている。
- 外壁は比較的有機的な形をしており、雨によって流される石灰が、地面の色と同化している。
- 建物は分棟となっており、木々やタルチョによって視界、空を遮っているため、全体像を把握することが難しい。
- 微地形に合わせるように各棟の高さが調整されている。
- 風はインダス川沿いを吹くが、一定した方向性はない。
- 肥沃な大地の低地に照らし出される僧院は、内部空間においても光を最大限に生かした劇的な空間となっている。



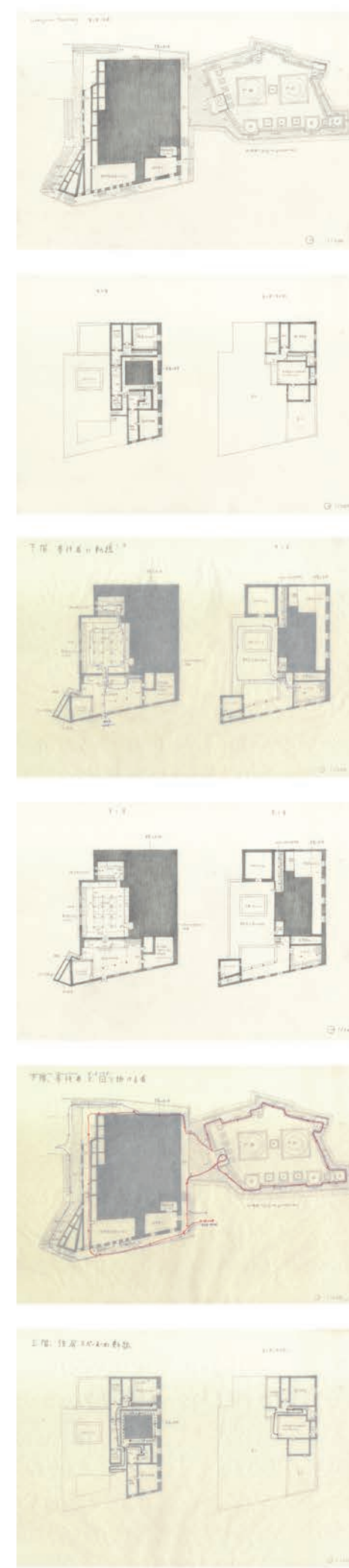
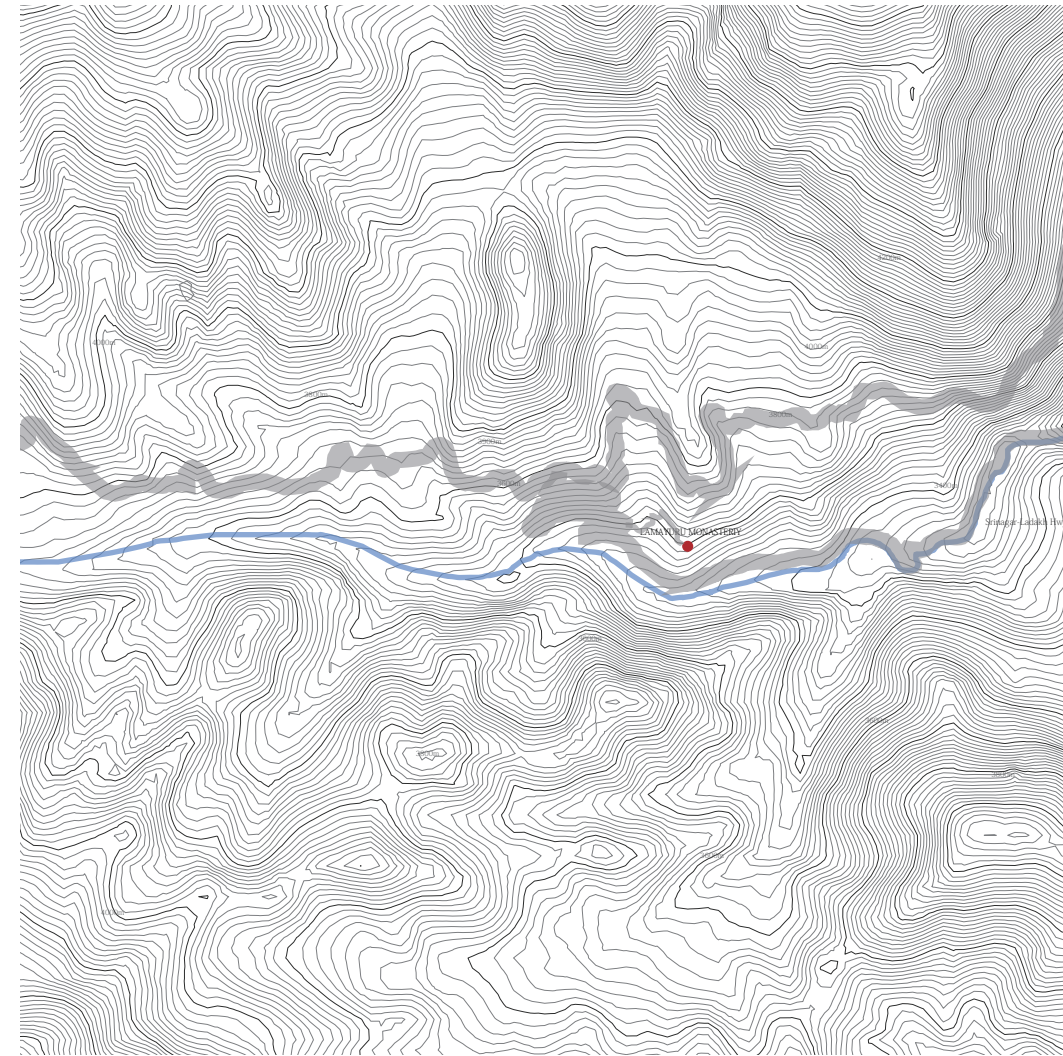


Lamayuru monastery

ラマユル僧院では、通常入れないような部屋まで見せてもらいスケッチや実測を行いました。その中で階が上がるにつれ、内部空間を貫く大地の面積が少なくなり、悟りに近い者が住む透明性の高い部屋になっているということがわかってきました。このように様々なかたちで3つの僧院において大地から空へのシークエンスが強く意識されていることがわかります。

環境・地形的特徴と僧院

- 僧院は、高くそびえる Moon Land の大地に鎮座しているように見えるが、4 層目まで大地が内部を貫いている。
- 最上階の部屋はガラスの部屋と呼ばれるように開放的な部屋となり、月面のような地形を見下ろす。
- 周囲の農村を見下ろすその構成は、僧侶のヒエラルキー、悟りに至る道のりを表す曼荼羅の構成を模している。
- 大地の裂け目を利用してつくられた室や、瞑想洞窟もあり、大地の中で仏教の思想を実現していく。
- 上層部では風が強く吹くが、農村ではあまり強くない。
- 朝は住居棟がある西側を最も早く光が照らし、夜も最も早く訪れる。
- 1 層目を周り続ける参拝者の動線が右回りに途切れないよう、明確に構成されている。



SUMMARY

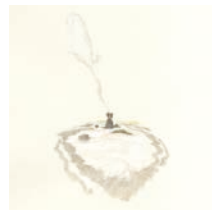
Reserch and design of the Tibetan Buddhism monastery
in Ladakh,Jammu and Kashmir,India

本研究は、インド、ラダックの仏教僧院や伝統住居を2ヶ月間調査し、その体験をもとにラダックのプガという地域を“公共地域”として保養所を提案するものです。

これまでラダックにおける調査は地質学や伝統医学、曼荼羅壁画にみられる仏教美術の分野でなされてきているが、文化大革命によって破壊されてしまっているチベットよりも古い建築物の集積があるにもかかわらず建築的な調査はまだ進んでいません。そこで私は外国の調査記録や文献によって既往研究を行い、ラダック僧院の形式と地形的特徴を表している代表的な3つの僧院において実測やスケッチによって調査を行いました。調査においてはその僧院に滞在しながら彼らの暮らしを体験し、記述することで、これまででなされてきたような実測のみのデータではなく、人の暮らしを含んだ生きた記録として残すことを心がけました。また、各僧院において描いた30枚ほどのスケッチは、私が体験した微細な質感や現象を表すよう、そこに落ちている砂や外壁として使われる石灰を混ぜる手法によって、その場所を訪れているような追体験できるものとして記述していきました。

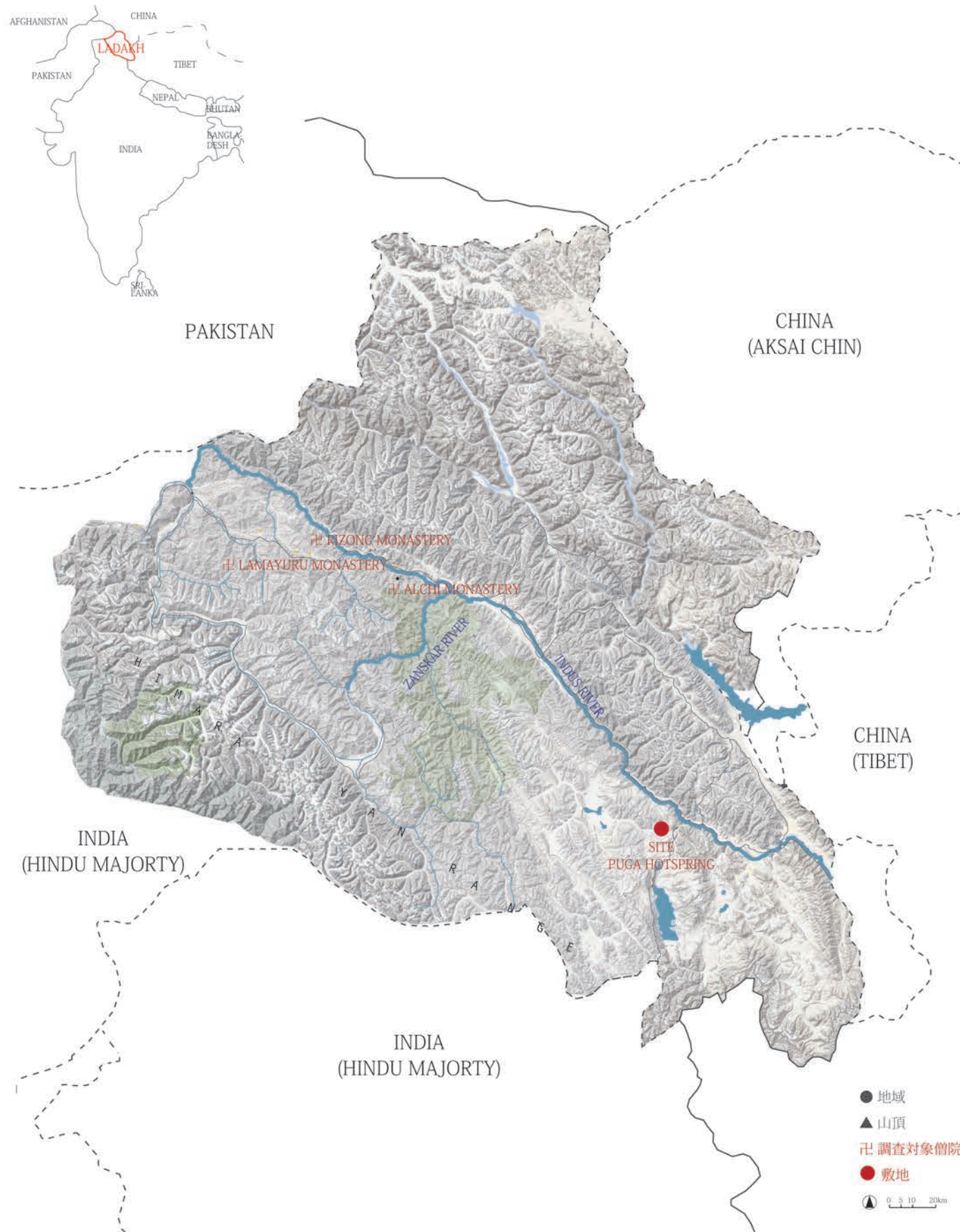
このような調査を行っているうちに、遊牧民の友達から彼の実家があるチャンタン高原の標高4500mを越える遊牧地帯には病院がないために年々遊牧民の数が減っていることや、『プガ谷』という温泉が湧き出ている地域は、莫大な地熱エネルギーを蓄えた土地であることから世界的に注目されているが、今後の開発のされ方によっては遊牧民の生活を脅かしてしまう恐れがあるということを開き、遊牧民地帯を巡りながらインタビュー、調査を行うことによって出来るだけ現実的なかたちで保養所を設計しました。

現在、ラダックにおける公共施設的な役割を担っているものは僧院なのですが、都市、レーでは近代化に伴って新たな建築の形を模索しており、コンクリートによる無機質な都市が出来てきているのですが、住民の間においてもそういった建築は受け入れられていません。私が設計したプガという地域は停戦ラインにも近く、現状も共有地として使われていることから、この計画においても公共建築、さらに言えば公共地域となるように想定し、素材や構法はラダックの方法を用いながら、大地で採取した色を設計に取り入れるなど、そこでの空間体験は新しいものにしました。この案は私の調査をもとに現状で考えられるあくまで一案で、実際にはその時々で部分に対応しながら全体を修正していくことが必要だと思いますが、ラダックの友人に見せたところ、ラダックの建築そのものだけでも新しい感覚があるといって喜んでくれました。そしてまずはこの案をもって、もっと多くの人に現地で提案できたらいいなと思います。



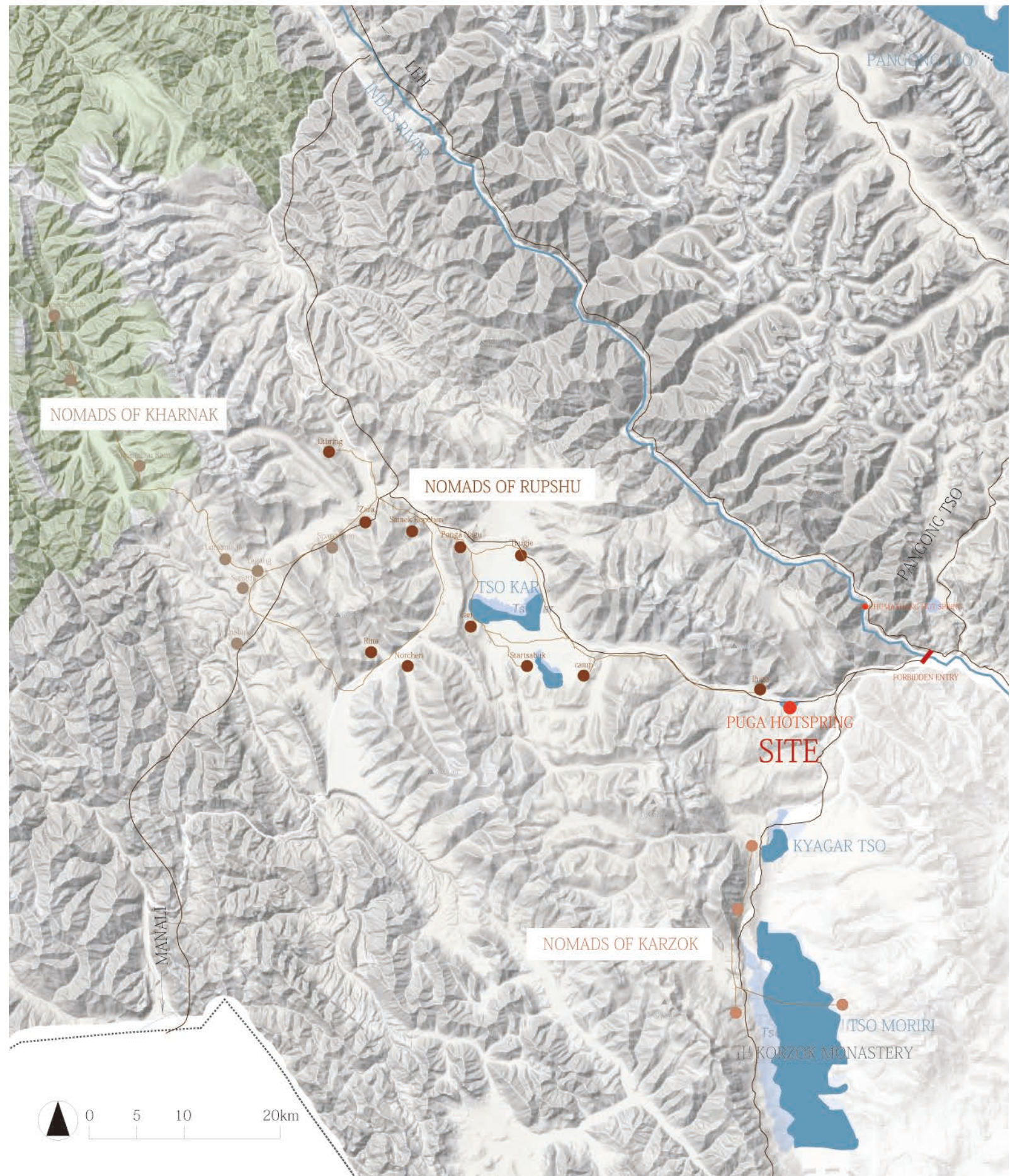
WIDE AREA MAP

Ladakh,Jammu and Kashmir,India



CHUNGTANG PLATEAU

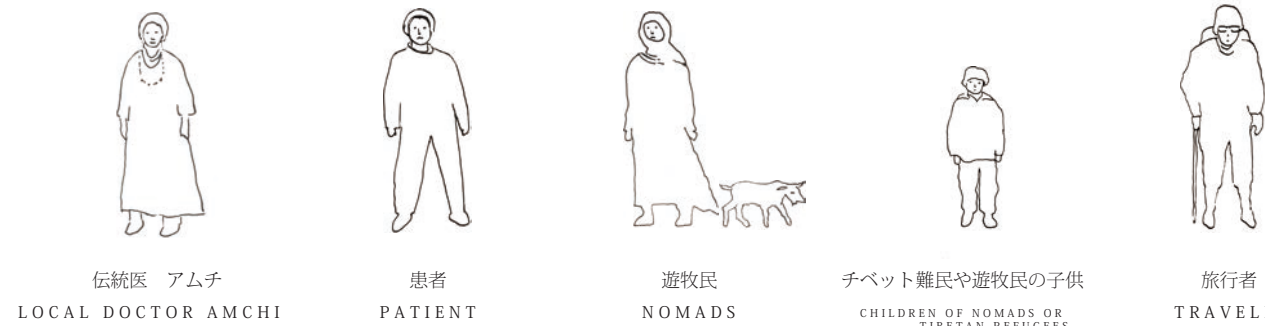
Nomads district : elevation 4000m-



INTERVIEW TO THE LOCAL PEOPLE

in Puga hotspring district, Chungtang plateau

調査を行う中で、遊牧民の暮らし標高が4200mを超えるチャンタン高原のpuga谷において地熱エネルギーの開発が行われようとしており、遊牧民の生活を脅かしてしまう恐れがあることを知りました。以下の資料が敷地調査の資料です。この地域の周辺には3つの遊牧民が転々と場所を変えながら遊牧を行っているのですが、そこにホームステイしながらインタビューをしていくと、このあたりでは病院がないために年々遊牧民の数が減っていることや、Pugaは動物達に栄養を摂らせるための遊牧民の共有地になっていること等を開きました。また、実際にPugaを訪れると、伝統医のアムチに進められて病の治療のため温泉に来る人が沢山いるが、滞在する場所がないことや、多くの旅行者がここに留まる場所がない等、ここに書いてある多くの問題がわかってきました。



・アムチが大勢の患者をつれてくることもあるが、滞在場所に困ることがある。

・温泉は流れているが、温度を調整する機構がないために、お湯に浸かって治療を行うことができない。

・泊まる場所がないためにテントを張っているが、同じ時期にここに来る人を見つけないと来ることができない。

・この場所が開発されてしまったら遊牧に支障が出てしまう恐れがある。

・病気になるっても近くに病院がないので、年々遊牧民の数が減っている。

・冬の時期には親のいる遊牧地域に帰るが、それまでの冬の間の寒い時期を学校で過ごすなくてはならない。

・遊牧民の学校として世界から注目され、さまざまな環境問題に関するプログラムに招待されているが、あまり認知されていない。

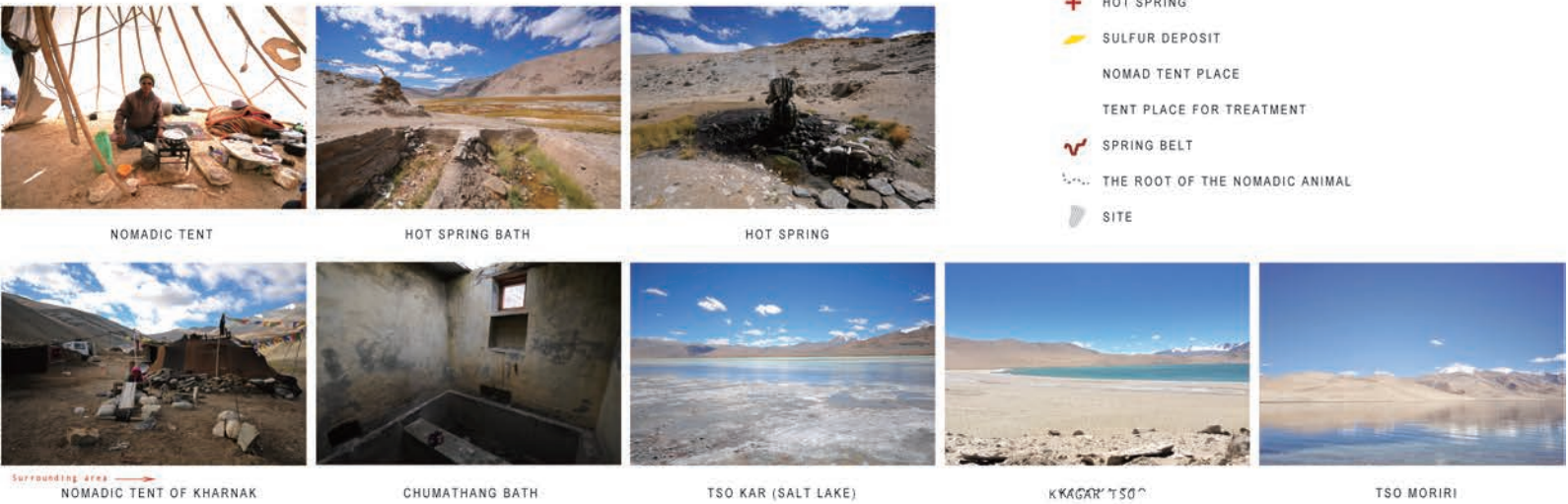
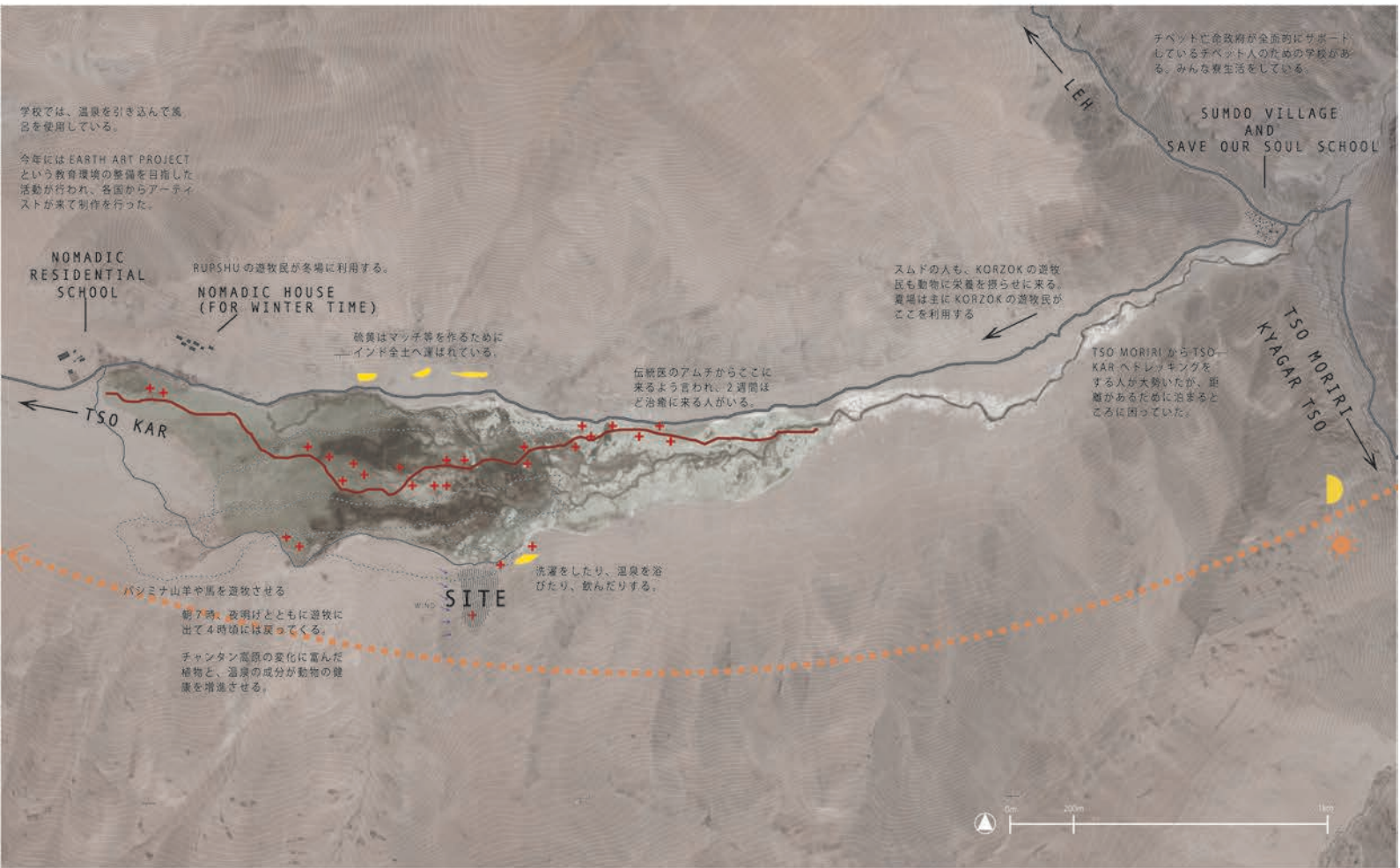
・トレッキングや観光等でこの地を通る人が多くいるが、泊まる所がなくヒッチハイクを余儀なくされている。

・旅行者はお風呂に入れる機会が少ないので、ここで温泉に入ろうと思うが、温度が高すぎるため入ることが出来ない。

私は一般的なラダックの暮らしや遊牧民の暮らしも体験してきましたが、たとえば畑を耕した後に歌う歌や、祝い事のときに使われる食器、寝室の屋根に穴があいており、そこから空が見える構成などが僧院空間と共通しています。ラダック全体として共通した建築や、思想があり、それを僧院空間が代表しているということを知りました。そこでこの設計においてもそのようなことを大切に設計をしたいと思いました。

SITE MAP

Puga hotspring area : elevation 4300m



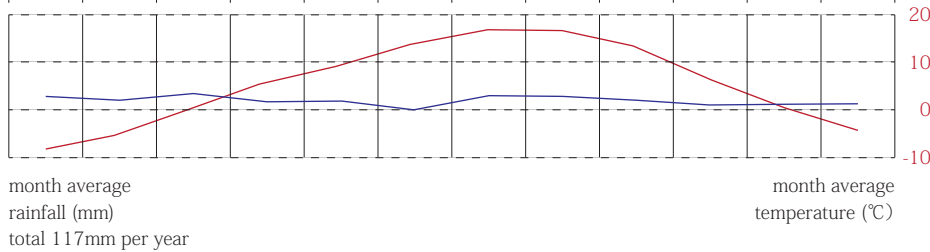
USAGE TABLE

Puga hotspring area : elevation 4300m

そこでプガで必要とされる機能を利用者別に整理してみるとこのようになります。またその使われ方を季節ごとに整理していくと、図の黒いバーがそれぞれの訪れる頻度が高い時期なのですが、夏場の利用が高く、冬はラダックの人は外出しないので、遊牧民や近くの学校の子供が病気になったときに滞在、治療するための伝統医アムチのいる場所と宿泊場所が必要だということがわかってきました。

	Hot spring	Amchi clinic	Guest house	Wash house	Laboratory	Temple	School class	Stove	My house
Nomads (Karzok, Rupshu, Kharnak)	◯	△		◯		◯			◯
Nomads (Sumdo)	◯	△		◯		◯			◯
Children	◯	△	◯		◯		◯		◯
Patients and Amchi	◯	◯	◯	◯				◯	◯
Travelers	◯		◯	◯	◯		◯	◯	◯
Observer	◯	△		◯	◯		◯		◯

	Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	June	July	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.
Nomads (Sumdo)												
Nomads (Karzok, Rupshu, Kharnak)												
Children												
Patients for Amchi												
Travelers												
Observer												



CONSTRUCTION PHASES

Puga hotspring area : elevation 4300m

設計は、敷地の現状からフェーズを経て段階的につくられていくような手法で行いました。具体的には近代的な都市計画手法(トップダウン)でもなく、ヴァナキュラーな自然発生(ボトムアップ)でもない手法を探るため、フェーズによって段階的な発展をみる計画を行います。そのために計画者である私の家を最初におき公共施設の性格を持たせることで、住民の希望を受け入れながら長期の視点を持って全体をつくりあげていきます。下はその段階的発展を予測した計画例です。

	phase 1	phase 2	phase 3	phase 4
background	・熱源の近くの2つの谷の間に療養者が集まる ・遊牧民は動物と共に麓にテントを張る	・療養者のための温泉整備 ・アムチの滞在場所が必要となる	・温泉設備の拡張 ・滞在者のスペースの充実 ・広場の機能的拡張	・各場所の恒常化による整備 ・遊牧民の子供のためのスペース
construction	・私の家を建設 ・折りの場を置く	・野外風呂の整備 ・アムチの場をつくる ・テントを張る場所の風除け ・私の家の夏の住まい	・温泉にテントと足湯設置 ・洗うための広場 ・広場を話し合う場として整備 ・寝る場所の1階をつくる	・私の家を窓口とする ・温泉の建物化 ・アムチの場の拡張 ・寝る場所の2階をつくる ・洗い場に学習スペース併設
facilities	My house └ 遊牧民と療養に来るひとのいる場所の中継地点に私の家をつくる Temple └ 3つの地域の遊牧民の集まる折りの場をつくり、全体の規模を緩やかに規定する。	Hot spring └ 最低限壁に囲われた野外風呂をつくる Amchi clinic └ アムチと療養者の部屋をつくる Guest house └ 崖側に集まるテントが利用する風よけ壁の設置	└ 旅行者も訪れるように整備されてくるので窓口として機能しはじめる Wash house └ 汗垢等をつけていた熱源のそばに広場をつくることで、洗濯物を乾かしたり食事をするスペースをつくる	└ 子供たちの教室が利用されていないときには、地熱やバシナに関する展示などの運営を行う School class └ 洗い場の近くに子供たちの教室をつくり、教室として使用されていないときは展示等を行う。 Laboratory └ 各機能が建築化してくるので、地熱研究所をつくり暖房設備などを配備していく
diagram				



PHASE 0

現状としては、温泉が湧き出ている辺りに治療に訪れる人がテントを張り、流れ出した温泉水のあたりで身体を洗ったり温泉水を汲んでいます。そしてふもとのあたりでは、遊牧民がテントを張り、この温泉水が流れ出した湿原で動物達に栄養を採らせています。



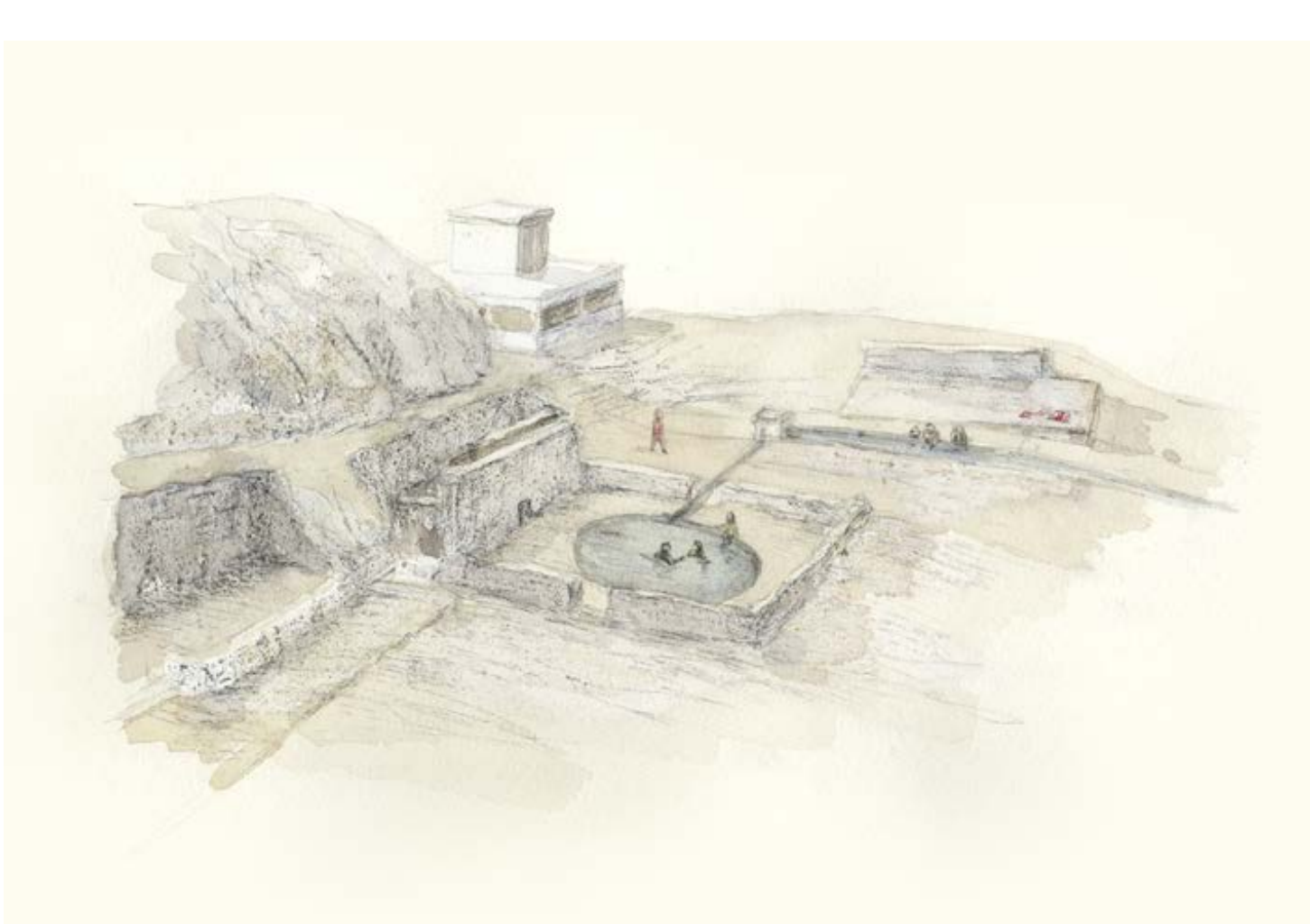
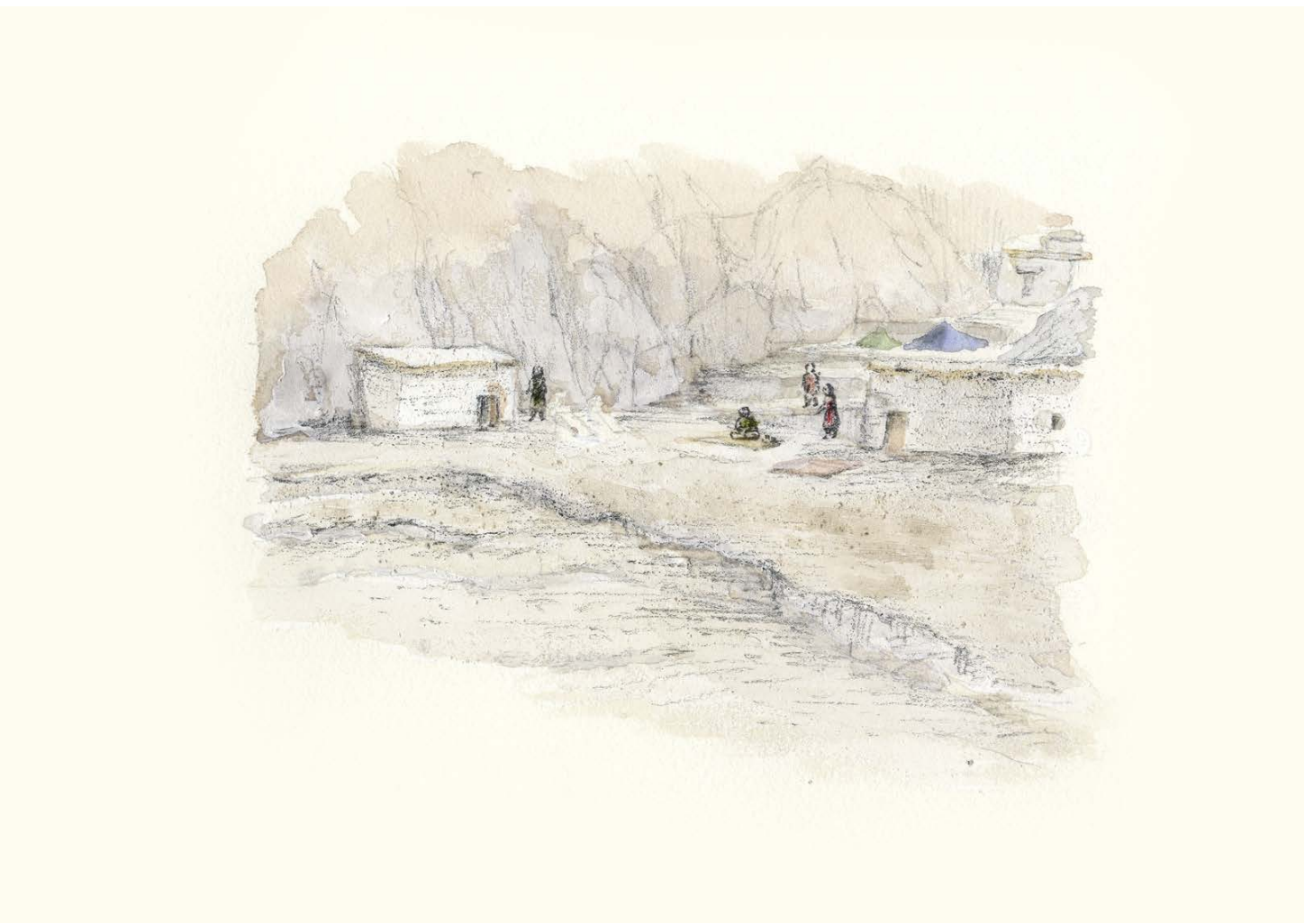
PHASE 1

そこで最初に、地域の人に話を聞いたり、話し合う場所として、私の家を遊牧民と療養に来る人の中継地点につくります。このことで小山の間がより広場のような空間として有効に使用できるようになります。また、山に沿ったところにこの地域の周辺で遊牧する人々の祈りの場所をつくります。これは、遊牧民も地域を越えて交流することがあり、その祈りの場所は普段生活する場所から少し離れた場所にあるためです。同時に全体の規模を緩やかに規定することにもなります。



PHASE 2

つぎにフェーズ2では、療養をする人や外国人が利用する簡易的な野外風呂を、フェーズ1で形を与えられた広場の隅につくります。また同じように広場の周囲に、冬場に病になってしまう遊牧民などのためにも、アムチが季節を通じて滞在できる場所を祈りの場に近い場所に、そしてともと風をよけるために崖側に集まるテントが、より便利に利用できるような風よけの壁をつくります。



PHASE 3

そして、フェーズ3では、少し長い期間滞在する人の滞在場所として、風よけを基礎として1層目をつくります。また、このころには訪れる人も増えているので、熱源の側で洗い物をした人たちが洗濯物を干したり、調理につかうお湯を汲めるような場所をこちらのスペースにつくります。お風呂は野外のお風呂から遊牧民のテントをかけて半恒久的な囲われた空間にしていきます。



PHASE 4

最終段階であるにフェーズ4ではこのような風景になるのですが、温泉を建築化し、泊まる場所も需要に応じて二層化していくなど、建物を拡張することによって、この場所が長く便利に使用できるように、そして旅行者でも利用しやすいよう整備していきます。またこの段階では、各機能が建物化してくるので、建設が求められている地熱研究所をつくり、地熱エネルギーによって暖房設備などが配備できるようになってきます。また敷地の近くに遊牧民学校があるのですが、その子供たちが利用できる教室を母親たちのスペースである洗い場の近くにつくります。

